

# 笠原小学校の英語教育の歩み（1）

第1期（2003年度～2005年度）の研究から  
 -コンテンツ・ベーストの手法による授業改善-

The History of English Education at Kasahara Elementary School from 2003 to 2005.  
 -How English lessons were created through Content-Based Approach-

瀧 沢 広 人

Hiroto TAKIZAWA

## 1 はじめに

1986年（昭和61年）の臨時教育審議会第二次答申における「英語教育の開始時期についても検討を始める」の提言から、小学校における英語教育の導入が段階的に進められ、2020年（令和2年）、新教育課程の下、小学校5・6年生において外国語が教科として、3・4年生においては外国語活動が領域として新設されることとなった。教科化に至るまでのこの間、また現在の英語教育を含め、大きく小学校英語教育の導入は、4つの段階に分けられる（表1）。

1つ目は、「研究開発校の指定」である。1992年（平成4年）、大阪府の公立小学校が2校（真田山小・味原小）、「国際理解・英語学習」指導の研究開発学校として指定された。その後、徐々に研究開発学校を増やし、1996年（平成8年）には、47都道府県の全てに1校ずつの研究開発学校が指定された。これが本格的に日本で小学校の英語教育を研究し始めた最初である。

2つ目は、「総合的な学習の時間における英語活動の実施」である。2002年（平成14年）の学習指導要領改訂による総合的な学習の時間の新設により、英語活動を行うことが可能となった。しかしながら、名目は国際理解教育であり、文部科学省（1998）は、小学校学習指導要領（平成10年告示）の「総則」において、「国際理解に関する学習の一環としての外国語会話等を行うときは、学校の実態等に応じ、児童が外国語に触れたり、外国の生活や文化などに慣れ親しんだりするなど小学校段階にふさわしい体験的な学習が行われるようにすること」とした。しかしながら、全国で英語活動が行われる中、中央教育審議会（2008）は答申において、「外国語活動を義務教育として小学校で行う場合には、教育の機会均等の確保や中学校との円滑な接続等の観点から、国として各学校において共通に指導する内容を示すことが必要である」と示した。さらに、「また、外国語活動の質的水準を確保するためには、まず第一に、国として共通教材を提供することが必要と考えられる」と提言した。そこで文部科学省は、同年（2008年）、副教材『英語ノート』の試作版を作成し、翌年（2009年）、全国の公立小学校に「英語ノート1」と「英語ノート2」を配付するに至った。指導資料やデジタル教材も同時に配付され、国としての共通の内容を示した副教材としての英語ノートの活用が始まったのが、この第2段階の時期である。

3つ目は、「小学校5・6年における外国語活動の新設」である。2011年（平成23年）、学習指導要領が改訂され、週1時間（年間35時間）の領域としての外国語活動が開始された。この時期、英語ノートは一旦廃止となり、それに代わる教材として、2012年（平成24年）、「Hi, friends!1」「Hi, friends!2」が誕生した。音声重視の「英語ノート」と比較し、「Hi, friends!」では、積極的に文字が導入されているのが特徴的である。2015年（平成27年）には、2020年度からの新教育課程を鑑み、「Hi, friends Plus」が、英語教育教科地域拠点事業の研究開発校に配付された。

そして、4つ目の段階が、今回の「外国語の教科化」である。学習指導要領の改訂により、小学校3・4年生で領域としての外国語活動を週に1時間（年間35時間）、5・6年生で教科として外国語を

週に2時間(年間70時間)が行われ、5・6年生に至っては、教科ということもあり、教科書を用いて授業を行い、数値による評価も行われることとなる。

このように、1986年の臨時教育審議会の答申から約34年の時を要し、日本の小学校英語教育は、段階的に導入されてきた。その中で、今回、研究対象とする岐阜県多治見市立笠原小学校は、2003年(平成15年)に文部科学省から研究開発校の指定を受け、総合的な学習の時間を用いての英語活動を行う研究を始めた。段階としては、小学校英語教育導入の第2段階に当たる。

本研究は、2020年、検定教科書による英語授業が始まる中、どのような思いで英語授業を創りあげてきたのか先駆的な実践を埋もれさせないように、記録に留めることを目的とする。

段階	年	内容	文部科学省の動き
段階1	1992年～ (平成4年)	研究開発校の指定 大阪市の公立小学校2校において、英語活動が開始され、小学校における英語教育の研究が始まる。	研究開発校の指定(1992年) 全都道府県に研究開発校を指定(1996年)
段階2	2002年～ (平成14年)	英語活動の開始 学習指導要領の改訂に伴い、総合的な学習の時間(新設)により、国際理解教育としての英語活動が可能となる。	小学校学習指導要領の告示(1998:平成10年) 『英語の使える日本人の育成のための戦略構想』(2002) 『英語の伝える日本人の育成のための行動計画』(2003) 中央教育審議会答申(2008年) 英語ノート1・2
段階3	2011年～ (平成23年)	5・6年生における外国語活動の必修 学習指導要領の改訂に伴い、5・6年生における外国語活動が新設され、週に1時間の授業が必修となる。	小学校学習指導要領の告示(2008:平成20年) Hi, friends!1・2 Let's Try!1・2, We Can!1・2
段階4	2020年～ (令和2年)	3～6年における外国語授業の必修 学習指導要領の改訂に伴い、3・4年生の外国語活動が領域として、5・6年生の外国語が教科として新設となる。	小学校学習指導要領の告示(2017:平成29年) Let's Try!1・2(小3・4) 検定教科書(小5・6)

表1 小学校英語教育導入の流れ

## 2 本研究について

### 2.1 研究の目的

2020年から全国の小学校の5・6年生を対象とした外国語科の授業では、検定教科書の使用義務が発生する。検定教科書は、国の定めた学習指導要領に基づき作成され、国の教育水準を一定に保つために作成される教科用図書(以下、教科書)である。1986年の臨時教育審議会の提言から、文部科学省は段階的に外国語教育を教育課程に位置付け、2020年の教科化となった。その34年近くの間、各研究開発学校においては、小学校における英語教育の導入の方法を試行錯誤し、目標や目指す児童像、指導計画の工夫、評価、授業の工夫や改善に努め、成果を発表してきた。それら研究開発学校の知恵と工夫・改善の積み重ねにより、現在の形の教科書の作成に至ったと考える。逆に言えば、教科書は研究開発学校の研究成果の結果だけが残った形となり、どのようにして外国語の授業を創りあげてい

ったのか、どのような思いで教材を開発していったのか、何のためにこの学習活動を行うのかといった教材の思想や背景、学習指導の意図などを理解するのは困難であり、教科書を眺めただけではわからないことが予想される。まして研究開発校の創意工夫の足跡や試行錯誤の経過は読み取れないであろう。そこで、本研究では、岐阜県において先駆的に小学校英語教育を研究してきた学校を取り上げ、研究の取組を整理し、後世に残すことを目的とする。

## 2.2 研究の方法

研究開発学校である笠原小学校が作成した研究2年次の紀要(2004)、研究開発実施報告書(2006)年間指導計画(2005)の資料から、以下の観点で整理し、教育財産とする。

- (1) 笠原小学校の目指す児童像と実態、課題、英語活動の在り方、研究仮説と研究テーマ
- (2) CBAE (Content-Based Approach in English) の手法を取り入れた指導の工夫
- (3) 単元指導計画と授業展開
- (4) 成果と課題
- (5) 教育課程の工夫、E活動、E体験

なお、2003年の研究指定当時、笠原小学校は、笠原町に属し、1小・1中、さらには幼・保も1園という特色を生かし、「笠原の子は笠原のみんなで育てよう」を合言葉に、「笠原の子」の育成を目指し、教育活動を行っていた。よって英語教育に関する研究開発も、小学校独自ではなく、一貫教育を行う観点から、笠原小・中学校で指定を受ける形となっている。

なお、本論文においては、小学校の英語教育に焦点を充てていることから笠原小学校の取組についてのみ整理するものとする。そこで、笠原小・中学校の共同の名で作成した紀要も、笠原小学校について述べる実践等については、「笠原小学校は」という表記で書くものとする。

笠原小学校の研究は、次の通り5期に分けられ、本研究はその第1期を扱う(表2)。

表2 笠原小学校における研究指定

第1期：平成15～17年度	文部科学省指定研究開発学校
第2期：平成18～20年度	文部科学省指定研究開発学校
第3期：平成21年度	文部科学省指定英語教育改善のための調査研究学校
平成22～23年度	文部科学省指定研究開発学校
第4期：平成24～26年度	文部科学省指定研究開発学校
第5期：平成27～29年度	文部科学省指定研究開発学校

## 3 笠原小学校 第1期の研究概要

### 3.1 笠原小・中学校の目指す児童生徒像

笠原小・中学校(2004)では、英語教育における目指す児童像として、中学卒業時に「1人でも海外旅行ができるコミュニケーション能力を身につけた生徒」をキャッチフレーズに掲げ、「英語を恐れない子」「外国人に臆さない子」「他の表現方法を考える子」を具体目標にあげている。

研究時期(2003～2005年度)の時代背景は次である。2002年改訂の学習指導要領に基づき、小学校では、総合的な学習の時間で英語活動を行うことができるようになり、中学校では、学習指導要領の目標に「実践的コミュニケーション能力」というキーワードが登場し、従来の「国際理解を培う」という目標から、正面切ったコミュニケーション能力の育成が目標となった。そのような背景から、

笠原小・中学校では、英語の運用能力の育成をめざすことを目標とし、具体的な姿として、「1人でも海外旅行ができるコミュニケーション能力を身につけた生徒」としているのである。

### 3.2 笠原小学校の児童の実態と課題

#### 3.2.1 児童の実態

笠原小学校(2004)は、研究全体構想図において、平成16年度の4月の児童の実態を次のように捉えている(表3)。これらの実態は、前年度の平成15年度に学校全体の研究組織の中で行った1年間の英語活動を振り返っての成果であり、同時に課題にもなっていることを示している。

表3 研究全体構想図(平成16年度)から見る児童の実態

---

<p>&lt;成果&gt; ○英語に対する興味や関心が増し、英語を身近に感じる児童が増えてきた。</p> <p>○ALTやJTEのつかう英語を注意深く聞こうとする児童が多く、具体物やジェスチャーを助けに大まかに意味を理解する児童が多い。</p> <p>○耳慣れた英語を自然に発する子が増えてきた。</p> <p>○外国の人と自然に接することができる。</p>
<p>&lt;課題&gt; ●高学年に進むにつれ、正しい英語で言わなければいけないという意識が強く、伝えたいことがあっても消極的である。</p> <p>●高学年になるほど進んで話しかけようとする児童は少ない。</p>

---

#### 3.2.2 児童の実態に見る課題

これらの児童の実態から見えてきた課題は、英語を注意深く聞いたり、意味を類推したりすることには慣れてきてはいるが、積極的に英語に関わったり、進んで話しかけようとする子が少なく、特に高学年になるとそれが顕著となって現れることである(2004:15)。

そこで笠原小学校では、小学校卒業時に育ってほしい姿として、次の3つに整理した(表4)。

表4 小学校卒業時における目指す児童像

- 
- ・相手の話を積極的に聞こうとし、自分の思いを進んで話そうとする。
  - ・英語を聞いて相手の意思を理解すると共に、英語や身振り、具体物などを使って自分の意思を相手に伝える。
  - ・相手や場に応じて柔軟に対応し、話題を広げて楽しく英語で会話する。
- 

課題としてあがった「発話に対する消極性」では、伝えることを優先し、英語を用いながらも、身振りや具体物などを使って、自分の意思を相手に伝えようとするのできる児童を目指す児童像として設定し、英語をコミュニケーションの手段として捉えていることがわかる。さらに、高学年になるほど進んで話しかけようとする児童は少ないという課題から、「相手や場に応じて柔軟に対応し、話題を広げて楽しく英語で会話する」とし、様々な話題を持ち合わせながら進んで話す児童を理想像にあげている。

#### 3.2.3 教育実践上の課題

研究1年目(平成15年度)の4月は、従来通りのALTやJTEが主導の授業を行い、担任は補助的な役割でしかなかった。そこで5月、担任が主導する英語活動をめざし、担任、ALT、JTEの3者で授業を展開することとした。その過程において見つかった課題は、扱う内容に必然性が見いだされ

なかったり、内容が児童の実態に即していなかったりするという問題点が指摘された。これがのちにコンテンツ・ベイスト型の指導法にたどり着くことになる。6・7月には、教科の授業を、英語で行う取組が試行された。未習の教科内容を英語活動で行ったが、その指導過程において、定着や習熟を要求すると、どの学年でも英語が嫌いな児童が増えるということが明らかとなった。また、「児童の英語学習経験が少ない中、内容と使用する言語、及び活動を一致させることは難しく、活動が主体で遊び的要素が前面に出る傾向にあった(2004:16)」と報告している。この教育実践上の課題を解決するために、笠原小学校の英語教育の柱である「コンテンツ・ベイストの手法による英語教育」が出来上がっていく。

### 3.3 研究テーマ作成に至る基礎研究

#### 3.3.1 英語活動の時間の「在り方」

児童の実態や課題から、笠原小学校では、「内容に必然性を持たせる」「担任が授業を主導する」「定着や習熟を無理強いしない」等を英語活動の時間の在り方として設定し、笠原小学校が目指す「英語活動の時間」の在り方を、次のように整理した(表5)。

表5 笠原小学校がめざす「英語活動の時間」の在り方

- 
- 題材は扱う内容に必然性があり、児童の実態に即していることが大切である。
  - 担任が組織する。
  - 定着や習熟を安易に求めるのではなく、繰り返し聞かせ、話すことで結果として英語が身に付く。
  - ↓
  - ◎児童の実態に沿い、楽しくて、知的好奇心を満たす**問題解決的な英語活動**の時間をめざす。そのために、総合的な時間を加味して主として教科の内容を取り入れた英語活動を実践する。
- (p.17 下線、強調は筆者)
- 

ここで「問題解決的な英語活動」という言葉が出ていることに注目したい。笠原小学校では、教科学習に問題や課題があるように、英語活動にも問題や課題を設定があってもよいのではないだろうかという問題提起をしている。問題や課題を設定することで、その解決のために児童は「目的」をもって活動に取り組むのではないか。そのことで聞くことや話すことの活動が「必然性」を持って行われるのではないかと仮説を立てているのである。そして、「単なる活動に終わらない授業」「聞くことを重視した授業」を目指した授業改善を図っていくこととなる。

#### 3.3.2 英語活動で取り上げる「内容」

もう1つ確認しておかなくてはならないことがある。それは英語活動で取り組む「内容」である。笠原小学校(2004)は、英語活動の内容の条件を次のように捉えている(表6:<>は筆者が加筆)。

表6 笠原小学校の英語活動の内容

- 
- すべての児童にとって共通の内容(話題)であること。<共通性>
  - 多くの児童がその内容(話題)に興味を持っているか、持つ可能性が高いこと。<興味・関心>
  - その内容(話題)を取り上げることで、楽しい英語活動を成立させることができること。
- <実効性> (p.17)
- 

以上の3つの条件を満たすものとして、笠原小学校は「教科学習の内容」に注目した。なぜなら教科学習は、児童が持つ共通の内容(話題)であり、内容(話題)の提示の仕方によって、児童の興味・

関心を持たせることができる。しかし、いかに内容に共通性があり、内容に興味・関心があっても、使用する言語が児童の実態にあっていなかったり、活動が難しすぎたりしては実態にあわない。そこで、＜共通性＞＜興味・関心＞に加えて、内容に＜実効性＞があるかを付け加えている。

### 3.4 研究テーマと研究仮説

児童の実態、課題、英語活動の時間の在り方、取り上げる内容等の検討により、「教科学習と英語学習を融合する形での研究」を柱に、笠原小学校の研究テーマ及び仮説が作成された（表7）。

表7 笠原小学校の研究テーマと研究の仮説

---

(研究テーマ)
英語に慣れ親しみ、進んで使おうとする子の育成 ～CBAEの手法を取り入れて～
(研究仮説)
児童の論理的思考や知的好奇心に訴える教科の内容を取り入れた英語活動の実践をし、日常生活に広げていけば、英語に慣れ親しみ、進んでつかおうとする児童を育成することができる。

---

## 4. 笠原小学校 第1期の研究内容

### 4.1 CBAEの手法を取り入れた指導の工夫

CBAEとは、Content-Based Approach in Englishの略であり、「伝え合う内容を重視した学習」である（2004：3）。また、CBAEの手法を用いた指導を「教科の内容を素材として英語活動にとり入れること」と定義する（同：71）。英語活動にCBAEを取り入れることによって、「伝える内容が明確である」「コミュニケーションを図る目的が存在する」「必然性のある言葉が繰り返し用いられる」等の良さがあるという（表8）。

表8 CBAEを取り入れる良さ

---

・ 伝え合う内容がはっきりとしており、コミュニケーションを図る目的を持ちやすい。
・ 言葉が繰り返し使用される場面を設定し、その中で「内容」を伝えるために必然性のある言葉が繰り返し使用される。
・ 学習内容に興味を持てば、その中で使用される言葉も児童生徒にとって生きた言葉として感じられ、英語の語彙や表現を理解していくことが容易である。

---

また、笠原小学校（2004：71）によると、試行錯誤を繰り返しながら、CBAEの手法を取り入れた英語活動の在り方を工夫していきながら授業実践を進めてきた結果、CBAE学習に関して、明らかになってきたことがあるという。

1つは、「なぜCBAEが求められるのか」という根本的な問題である。笠原小学校の分析では、その当時（2004年）、英語活動に取り組んでいる学校は年々多くなっているが同時に、既に壁にぶつかっている学校も見られたという。児童は、楽しさに主眼をおいた英語活動に飽き始め、知的な欲求を求めているというのである。そこで、笠原小学校の教科学習の内容を取り入れた英語活動の取組は、児童の知的好奇心を高めることができ、また、教科学習は学校間での共通の内容でもある。さらに、作成した指導計画は、他の学校でも応用の効く共通性がある。

2つ目は、「CBAEで大切なことは何か」である。笠原小学校が挙げているのが、「問題解決的な活動にしていくこと」である。問題解決的な英語活動にしていくことで、児童の知的欲求を満たすことになる。その際、どの教科のどの内容をどのように取り上げるか課題となる。この「問題解決的な活

動」という考え方は、第1期の研究から第5期の研究まで貫く大事な要素となっている。

## 4.2 単元指導計画と1単位時間の指導過程

### 4.2.1 単元構成について

笠原小学校(2004)では、単元の指導計画を作成する際、大きく3つの配慮を行っている。

1つは、「児童が興味を持つ題材を用いること」である。児童が題材に興味を持てば、その内容について聞いたり話したりする英語表現に慣れ親しませることができるからである。

2つ目は、「平易な英語表現を取り入れること」である。平易な英語表現を、場面を変えて何度でも使用することで、児童にとって英語に慣れ親しみやすくなる。

3つ目は、「聞く活動を適切に仕組むこと」である。言葉を身に付けていく最初の段階は、理解可能な言葉を多く耳にする。また理解できる英語を繰り返し耳にすれば、その言葉は意味ある言葉として記憶され、発話段階において、さほど抵抗なく口にすることができるという。特に低学年では、ネイティブの発音を多く聞くことは英語の音的特徴を吸収する時期として効果的であるという(p.22)。

単元構成の特徴を1年生の単元を例に考察してみたい(表9)。

表9 1年生の単元構成

月	単元名(教科との関連)	学習内容
4	あいさつをしよう (全校共通課題)	How are you? I'm... I like... Do you like ...?等の表現に親しみ、気分や好きなものを聞き合いながら仲間と挨拶する活動を楽しむ。
5	いくつかな (算数) 歯と食べ物 (図工) 何時かな (算数)	・ How many? - One....のやり取りをしながら、数の言い方に興味を持ち、数を聞き合う活動を楽しむことができる。 ・ Good for teeth or bad for teeth?などの表現に親しみ、歯によい食べ物、歯に悪い食べ物を知り、正しく歯磨きをする活動を楽しむ。 ・ What time is it? It's....のやり取りをしながら、時刻を読む活動を楽しむことができる。
6	リズム発表会をしよう (音楽)	Can you do this?を使ってできることを聞き合ったり、Good! Great! Fantastic!を使って声を掛け合い、演奏するリズムを決め、発表する。
7	形であそぼう (算数)	How many triangles are there? One.のやり取りをしながら、三角形で作った絵を見せながら、使った色紙の数を尋ねたり答えたりする。
9	季節と月 (国語)	What color is spring? Pink. のやり取りをしながら、季節と色を組み合わせる活動を楽しむことができる。
10	ふしぎな絵 (図工) すきな海の生き物 (生活)	・ Fold the paper in half. Open the paper. Cut the paper. などの表現を用いて紙工作を楽しむことができる。 ・ The color is black. Do you have any questions? Long or short? などのやりとりをしながら、先生や仲間の好きな生き物を見つける。
11	ともさんはどこ? (国語) みんなでつくろうフェスティバル(生活)	・ What color? It's.... He/She is wearing ....Here.のやり取りをしながら、絵の中の人物やクラスの仲間を見つける活動を楽しむ。 ・ May I help you? ..., please. 等のお店で使う表現を使ってコミュニケーションを楽しむことができる。
12	どっちにしよう (国語・図工)	Which do you want, a or B? ..., please. のやり取りをしながら、反対語の言い方に慣れ親しみ、クリスマスカードを作る活動を楽しむ。
1	あしたへジャンプ (生活)	How old? Can you guess? のやり取りを通して、友達同士で成長を認め合う活動を楽しむ。
2	クラスで一番人気は?	・ How's the weather? It's... や What season do you like? I like ...

	(算数) 晴れ時々曇り一時雨	のやり取りをしながら好きな動物や本、デザート、遊びを調査する。 ・ How's the weather? It's sunny, のやり取りをしながら、天気に関係あるヒントをジェスチャーで表したり答えたりする。
3	どっちが長い? (算数)	How long? It's ..c,m long. 等の表現を用い、身近な物の長さを測ったり、比べたりして尋ね合い活動を楽しむことができる。

この単元計画の1つの特徴は、教科学習の内容を英語活動の時間に上手に組み、内容を大事にした英語授業を組み込んでいることがわかる。5月の「歯と食べ物」では、虫歯予防のポスターを描く図工の題材とからめ、色々な食べ物を、歯に良いもの (Good for teeth.)、歯に悪いもの (Bad for teeth.) という形で英語表現に触れさせたり、「どうしたら歯がきれいにみかけるかな」として、場所を表す up や down, front, back, left, right の語を教科学習の内容と重ね合わせたりしながら、単元の指導計画を作成していることがわかる。教科で学習した内容を英語活動の時間で、英語でやり取りを行うカリキュラム構成となっている。

2つ目は、Content-based であるということである。そのことにより、中学校のような Grammar を中心とした単元の配列ではなく、Content を中心とした配列になっており、例えば、7月の「形であそぼう」では、How many triangles are there? という中学校では2年生で学習する表現も、算数と言う教科学習の場面と合わせることで、扱う英語に必然性を持たせ、場に合った英語表現を用いることから、1年生でも実施できるのである。CBAE の手法による英語活動は、児童に興味関心のある内容を取り上げることに大きな特徴があると感じる。

3つ目は、単元内の構成が、易から難 (易しいものから難しもの) への配列を意識している点である。例えば、第1時で必要となる語彙や表現をゲームやアクティビティを用いて学習した後、第2・3時と言語材料を用いながら、繰り返し、練習を行う構成になっている。

#### 4.2.2 1時間の授業構成

1時間の授業では、学習過程を4つの基本的なステップに分けている。

1つは、Greeting & Song time (あいさつ・歌) である。ここでは、あいさつや歌によって英語学習の雰囲気を作ることをねらいとしている。2つ目は、Practice time (練習) である。中心となる活動で用いられる単語や表現方法に触れ、聞くことに重点を置く。その際、単純なドリルとしないよう留意する。短時間で色々な活動を通して、語彙や表現に触れる。3つ目は、Activities time (言語活動) である。ここで、中心的な活動を行うことになる。触れさせたい英語表現に慣れ親しませることを目的とし、児童同士でコミュニケーションを楽しむ時間である。4つ目は、Comments (評価・振り返り) である。担任やALT、JTEによる評価を行う。ここでの役割として、ALTはネイティブスピーカーとしての立場からの評価を行い、JTEは、コミュニケーション全般にわたる評価、担任は、活動全般に関わることや個への評価を行うとしている (p.23)。ネイティブスピーカーとしての立場からの評価ということから想像するに、英語表現や英語の発音等、言語に関する内容での評価と考えられる。また、JTEは、コミュニケーションに関わるということから、英語の伝わりやすさ、ジェスチャー、声の大きさなどの視点、担任は、活動全般ということから、英語学習に向かう姿勢も含め、評価すると読み取る。このように評価者の役割も共通理解を持って行われている。

### 5 笠原小学校 第1期の研究の「成果と課題」

以上の研究を進めた結果、笠原小学校 (2006) では、次のような成果につながったと成果をまとめている (表 10)。成果の中では、CBAE 学習の高学年での活用効果をあげている。話すことを臆していた高学年が、CBAE の手法を取り入れることで、伝えるべき内容を持ち、伝える目的が生まれ、さらに問題解決的な学習により、英語ゲーム等には得られない知的な欲求が満たされたことと考えられ



る。また、課題については、「年間指導計画を見直す」「CBAE の手法に関わる理論的な裏付けを基に授業実践を進める」「英語に触れる場を日常的にし、英語環境を整える」等をあげ、次年度への研究につなげている。

表 10 成果

(学習指導に関して)

- ・英語に興味関心をもち、英語を身近に感じる児童が多くなった。
- ・積極的に英語を使っていこうとするまでには至っていないが、挨拶などの慣れ親しんだ英語の表現を使う姿が多くなってきた。
- ・「CBAE 学習」は、児童の知的欲求を満たすことができるような学習過程が仕組みやすくなるため、特に高学年において有効に働くことがわかった。

(教員に関して)

- ・教師の児童に対する関わり方の大切さを実感するとともに、教師が進んで英語を使っていこうとすることが、英語を積極的に使っていく児童の姿につながるということがわかり、教師の意識改革につながった。
- ・英語研修及び指導力向上のための計画的な教職員研修を行うことにより、研究への共通理解を図ったり、教師の指導力向上につなげたりすることができた。

## 6. 考察

笠原小学校の第 1 期 (2003-2005 年度) の研究から得られた知見及び、考察を行う。

1 つ目は、「問題解決型の授業」という発想である。笠原小学校の言う「他教科でも問題解決的の授業を行っているので、英語学習でも問題解決的の授業もあり得る」という意見に筆者も賛成である。とかく言語学習は、規則を教え、言う練習をし、実際に使ってみるという PPP (Presentation, Practice, Production) の流れが一般的にある。笠原小学校では、その最初の P (Presentation) の前に、課題を投げかける。そして、その課題を解決するための言語方法を学び、言語練習 (Practice) を行い、言語活動 (Production) を行っていく指導過程を考案した。課題を解決するという発想は、ぜひ教科書活用時代でも、残したい考え方である。試しに、手元にある教科書を開くと、5 年生に日課を扱う単元がある。What time do you get up? I get up at 6.などの表現を用いて、友達の日課を尋ねたり、自分の日課を紹介したりする学習であるが、ここに問題解決的な学習を取り入れると考える。そこで「1 日の生活を見直そう」と課題を提示する。生活を見直すためには、他との比較が必要である。友達は何時に起きて、何時に寝ているのか、平均睡眠時間は何時間位か、家庭学習時間はどのくらいか。また、友達に尋ねるだけでなく、理想的な時間について保健の先生に尋ねてもよいだろう。さらに、日本だけでなく、世界の同年齢の子どもたちはどうかなど、問題解決的な学習により、同じ言語材料を単元内で繰り返し使用できる良さが、個々にはあると考えられる。また、笠原小学校の単元の指導計画からも、基本表現の繰り返しを意図していることが見受けられる。笠原小学校の研究でぜひ残したい一面である

2 つ目は、Content-based approach in English (CBAE) の考え方である。英語学習を独立した時間とするのではなく、他教科で学んだ学習内容を用いて、英語学習の時間に、英語を用いて課題解決していく方法を笠原小学校ではとっている。そのため、他教科の学習内容と時期を調べ、調整し、年間指導計画に組み込む。その際、平易な英語表現を用いた学習になるよう内容も精選する。CBAE の手法の良さは、教科学習の内容は児童にとって共通の内容であり、教科で学習した内容であるので、興味・関心のある内容となっている。よって、教科の内容と英語学習を結びつけるようにする。これ

は多少の時期のずれがあっても構わない。「レストランに行って注文しよう」という単元が2学期にあったとする。もし1学期に栄養の学習を家庭科でやっていれば、「1学期に家庭科で食事のバランスについて勉強したよね」と言って、英語を用いて食べ物を赤・黄・緑に分けたり、朝、食べた物を尋ね合ったりしながら、食事のバランスを家庭科の授業を基に振り返る。すると学習指導要領（平成29年告示）で謳われている「コミュニケーションを行う目的や場面、状況」が自然と設定され、「じゃ、レストランに行ってバランスの良い注文をしよう」と教科統合型の授業となる。教科統合型と聞くとヨーロッパで開発されたCLIL（Content and Language Integrated Learning）を思い浮かべるが、2003年当時は、まだCLILの存在が広まっていなかったため、笠原小学校ではCBIの考え方を取り入れたと思われる。教科書活用の時代にあっても、単元の学習内容を教科で学習した内容と関連させて考えることで、児童に親しみのある内容となる。

## 7 終わりに

以上、第1期の笠原小学校の研究を整理した。笠原小学校では、児童の実態から課題を見つけ、また授業実践から課題を見つけ、担任主導による英語活動、内容を重視した問題解決型の授業を目指し、コンテンツ・ベースの手法を中心とし、英語活動を行った。CBAE学習等の時間は、研究開発校による柔軟な教育課程の編成により1年生から6年生まで年間70時間の英語学習としての時間が組まれている。CBAE学習等の時間の70時間は、教室等で行う英語活動を64時間（これをE学習と呼ぶ）と、実際の言語使用体験で6時間（これをE体験と呼ぶ）を合わせてCBAE学習等と呼び、併せると年間で70時間となる。また朝に行うE活動も設定されている。整理すると次の3つの学習や活動を行っていることになる。

○E学習（英語活動の時間）：CBAEの手法による英語活動の時間

○E活動（朝活動等の時間）：教育課程外の活動であり、週に2日、朝活動の時間に8:15～8:30の15分間に行う英語に慣れ親しみ、進んで英語を使おうとすることを目指した時間や、朝の会、帰りの会を英語で行うといった日常活動がある。朝や帰りの会では、日直が英語で司会を行い、シナリオも用意されている。

○E体験（体験行事等）：E体験とは、実際に英語を用いた体験を行う。外国人を学校に招いたり、放送委員会による英語による校内放送を行ったりするなど、英語を用いた環境を整備し、体験活動を行う時間である。

このように、学校全体で英語教育に取り組んだ笠原小学校は、その後、継続して英語研究に取り組むこととなる。また、笠原小学校で生まれて指導法の知見は、文部科学省作成の共通教材、英語ノート1,2, Hi, friends!1,2, Let's Try!1,2等の単元で活用されたり、また指導法や学習指導要領の内容に影響を与えてきた面が多々見られる。さらに、笠原小学校の英語教育第2期、第3期、と研究成果を整理し、2020年からの教科書活用時代での教育的示唆を残していきたい。

## 参考文献

- 中央教育審議会（2008）。「幼稚園，小学校，中学校，高等学校及び特別支援学校の学習指導要領等の改善について（答申）」
- 笠原町立小学校・笠原中学校（2004）。「平成16年度 笠原町一貫教育自主発表会（研究紀要・指導案）小中の接続を踏まえた英語教育の在り方～CBAEの手法を取り入れて～」
- 笠原町立小学校・笠原中学校（2005）。「年間指導計画」
- 笠原町立小学校・笠原中学校（2006）。「平成17年度研究開発実施報告書（第3年次）」
- 文部科学省（1998）。「『小学校学習指導要領（平成10年告示）』」